

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 23 日現在

機関番号：37123

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2014

課題番号：23593321

研究課題名(和文) 思春期にある小児がん患者とその長期生存者のレジリアンスを高める支援

研究課題名(英文) An intervention for improving resilience in adolescents and young adults with cancer

研究代表者

石橋 朝紀子 (Ishibashi, Akiko)

日本赤十字九州国際看護大学・看護学部・教授

研究者番号：80305838

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,000,000円

研究成果の概要(和文)： 研究の目的は、思春期と青年期(AYAs)のがん患者のレジリアンスを高めるために看護介入を行うことであった。研究の方法は介入としてポートフォリオを2回実施した。1回目は自分を発見し、2回目は未来の目標を設定する方法であった。面接とレジリアンスと社会的な支援に関する質問紙で評価した。調査はポートフォリオの前後の2回実施した。

AYA s の患者は10～21才の22名であった。ポートフォリオの前後で比較すると、その68.5%は、ポートフォリオ後でレジリアンスが上昇していた。結論として、ポートフォリオは、AYA s のレジリアンスを高めるために有効であると考えられる。今後さらなる看護支援の開発が求められる。

研究成果の概要(英文)： Adolescents and young adults (AYAs) with cancer display resilience. However, they generally do not receive appropriate psychosocial services. The purpose of this study was to improve resilience in AYAs with cancer through interventions. A case study research method was used. Portfolio was used for an intervention and conducted 2 times. The first time (T1) is for finding sense of self and the second one (T2) for making a future goal. An interview and two questionnaires were directed before and after portfolio.

The 22 participants were 10 to 21 years of age. Comparing to T1 and T2, the Childhood Trait Resilience Scale indicated that 68.5 % of the AYAs improved their resilience in T2. In conclusions, portfolio may be useful to improve resilience on the AYAs with cancer. The AYAs coped with their schoolwork because of informing their friends and classmates. The most participants had hopes and purposes. Interventions need to develop in the future.

研究分野： 思春期にある小児がん患者のレジリアンス

キーワード： レジリアンス 介入 ソーシャルサポート 希望

1. 研究開始当初の背景

治療の進歩にともない、治療終了後から、5年間の小児がん患者の生存率が米国では80%、日本では70~80% (Ishida, 2009)となっている。思春期と青年期のがん患者は認知的、情緒的、行動的な問題が生じるリスクをもっているが、強いレジリアンスをしめしている (Haase et al, 2014)。レジリアンスとは、弾力性や回復力などといわれている。例えば、思春期の小児がん患者は、過酷な健康問題に直面すると、体を動かして何かすることなどの対処方法をとる。治療がはじまるころには、それについてぐるぐる考える状態になる。しかし、がんであることを忘れることができるようになり、希望をもつようになる。最後に、積極的に治療に参加することができるという、自分には困難な状況に立ち向かう力があり、レジリアンスであることを自認できるようになる (Hinds, 1998) とのべている。レジリアンスは前向きな対処、希望、社会的支援に影響されるといわれているが、一般的には、適度な心理社会的支援をうけているとはいえない (Hinds, 2004)。思春期と青年期の小児がん患者がレジリアンスを高めるために、介入・支援に関する研究が必要である (Haase et al, 2014)。

2. 研究の目的

研究の目的は、思春期と青年期(長期生存者)の小児がん患者が、レジリアンスをたかめることができる支援のガイドラインを作成し、ケアの基準化とモデル化をおこなうことであった。支援方法は、患者自らが目的を設定し、それを達成するための戦略を考えることで、自信と達成感を感じるといわれているポートフォリオを使用することであった。その結果をもとに、ケアガイドラインを作成することであった。

3. 研究の方法

(1) この研究は、ケーススタディ法 (Yin, 2006)で行った。Resilience in Illness Model (Haase et al, 2014)の理論を基にした。このモデルはレジリアンスの経過を理解するための根本的な理由と、はっきりした到達目標への介入ができるようになっている。モデルは9つの要素から構成されている。その中で、今回の研究の目的に関係すると思われる5つの要素、社会的支援、勇気ある対処、病気に関係した希望、抽象的な自我、レジリアンスを採用した。

(2) 研究での介入は、5つの要素に関係するとおもわれるポートフォリオ (Suzuki, 2011)を使用した。ポートフォリオは、デザイナーなど個性を活かして仕事をしている人がもっている作品ファイルである。これまでにやってきた仕事がひとめでわかるポートフォリオは名刺や履歴書では表せない個性や得意をあらわしている。ポートフォリオに

いれるものは、例えば、夢や関心、興味あることを書いたもの、自分の持ち味やセンス、得意、個性が伝わるもの、作品や活動記録などを入れる。これをもとに、自分発見ポートフォリオを作成し、今の自分の思いや将来の自分への夢をいれる。次に、夢や希望をかなえるための目標をきめ、それを達成させるための具体的なことがらをきめてく。このポートフォリオは、自己を発見すること (パート1)と、未来の目的と目標を設定する (パート2) ように作成されている (鈴木, 2011)。パート1は15ページとパート2は21ページのシートがあり、考え方や思ったことの経過を直接記入するようになっている。

(3) ポートフォリオの介入の評価には、半構成的面接用紙、Childhood Trait Resilience Scale (TRS)、Social Network Mapを使用した。半構成的面接用紙は、思春期と青年期にある小児がん患者が、治療の前後に経験したことや諸問題に対処した方策を引き出すために作成された面接用紙である。希望に関する質問を追加した。Childhood Trait Resilience Scale (TRC) は、レジリアンスを測定するもので、29項目からなる。それには4つの要素“ I am ”, “ I have ”, “ I can ”, “ I will/do ”がある。Social Network Map は、患者が、サポートを受けている社会の人々を測定用紙に記入するものである。

(4) インフォームドコンセントは、患者が16歳以下の場合は保護者からも得た。調査は外来受診で、血液検査の結果をまっている約1時間で行った。調査は個室または外来の静かな場所で、患者と調査者の二人で実施した。面接はテープレコーダを使用し、テープは正確に転記された後廃棄された。

(5) 調査では、ポートフォリオを2回実施した。1回目はパート1で2回目ではパート2を実施し、患者がステップを踏みながら自分を見つめ、未来の目的と目標を決めていった。質問については調査者が答えた。調査は、1回目のポートフォリオ前と2回目のその後に計2回実施した。

4. 研究成果

(1) 調査期間は平成26年~平成27年で、1回目と2回目の調査の間隔は0~1年であった。22名の思春期と青年期の小児がん患者は、年齢が10歳~21歳で男性9名、女性13名であった。診断を受けたのは1ヶ月~7年前で、その内3名は再発していた。病名は急性リンパ性白血病、急性骨髄性白血病、脳腫瘍などであった。

(2) Childhood Trait Resilience Scale (TRS) の調査結果では、思春期と青年期の小児がん患者は、レジリ

アンスの総合点数をポートフォリオの前 (T1) と後 (T2) で比較した結果、T2 が高い値をしめした。T1 と T2 の総合点数を、思春期と青年期の小児がん患者ごとにグラフ化し比較した。その結果、患者には3つのパターンがあった。T2 で、パターン A (68.2%) は総合点数が上昇し、パターン B (13.6%) は平行、パターン C (18.2%) では下降していた。

次に、パターン A を4つの要因 “I am”, “I have”, “I can”, “I will/do” で比較すると、3つのタイプ (タイプ a, b, c) が明らかにされた。T1 のタイプ a は “I am” と “I will/do” が高い値をしめした。タイプ b では “I have” が、タイプ c では “I am” と “I will/do” が高かった。

さらに、それぞれのタイプを、T1 と T2 とで比較した。その結果、T2 で、タイプ a は、“I can” が、つぎに、“I am” が高かった。タイプ b で “I am” と “I will/do” が、タイプ c では、“I have” と “I can” が高い値をしめしていた。Social Network Map は、レジリアンスとの間に何の関係もみられなかった。

(3) 調査結果の考察として、

ポートフォリオは、それを使った介入でレジリアンスが高まったことから、思春期と青年期の小児がん患者に何らかの影響を与えていると考えられる。思春期と青年期の小児がん患者は、ポートフォリオを行ったことで、自分を発見し、目標を考えたことができたこと、その目標に向かってどのように実行すればよいのか具体的に考えることができた。患者は、人のためになるような自分になりたいと考えており、医療関係者や消防士など具体的な目標を設定できていた。この目標にむかって、数学に力を入れることやコミュニケーションを高めることなどを考えていた。このことで、自分自身のためにしなければならぬこと、自分の未来について理解できたことなど、自信と達成感を感じていた。

ポートフォリオは、思春期と青年期の小児がん患者のレジリアンスを評価するためには有効であると考えられる。レジリアンスに3つのパターンがみられ、レジリアンスが変化せず、また低下した思春期と青年期の小児がん患者については、研究を継続していくことが重要であると考えられる。

調査の限界は、1回目と2回目の調査の間隔が長い場合、1回目だけでなにかを考えていたのか思い出せない患者もいた。また、調査時間の長短にばらつきがあり、それが短い患者は十分に解答することができなかった。

(4) 結論として、思春期と青年期の小児がん患者は、ポートフォリオでレジリアンスが高められていた。レジリアンスを高めるための介入としてポートフォリオは有効である。またポートフォリオはレジリアンスが低い

患者を評価することもできるため、小児がん以外の小児領域で活用できると考えられる。今回、ポートフォリオの冊子を単純化し、効果的に介入できるように改良した。介入についての研究は少ないため (Hinds, 2004) 発展させていく必要がある (Haase et al, 2014)。

<引用文献>

Ishida Y. Transition issues of childhood leukemia survivors into adult care. Nursing Today (Jpn), 2011;26(3);30-35

Hinds PS & Martin J. Hopefulness and the self-sustaining process in adolescents with cancer. Nursing Research:37(6); 336-340.

Haase JE, Kintner EK, Monahan PO, Robb SL. The resilience in illness model, Part 1: Exploratory evaluation in adolescents and young adults with cancer. Cancer Nursing, 2014,37(3), E1-E12.

Hinds P. Shifting perspectives: adolescent-focused oncology nursing research. Oncology Nursing Forum, 2004; 31(2):281-287

Yin RK. Case study research: Design and methods. London: Sage; 2009

鈴木 敏恵、ポートフォリオ評価とコーチング手法：臨床研修・臨床実習の成功戦略、3-20、2011、医学書院

5. 主な発表論文等

[学会発表](計 1 件)

石橋 朝紀子・上別府 圭子、Portfolio intervention for improving resilience in adolescents and young adults with cancer. 46th Congress of the International Society of Paediatric Oncology, 2014/10/22-25, Toronto in Canada.

[その他]

石橋 朝紀子、岡村 純、上田 礼子、角南 勝介、小林 良二、小川 純子、Psychosocial strength enhancing resilience in adolescents and young adults with cancer, Journal of Pediatric Nursing, 1-10, DOI: 10.1177/1043454214563935. 査読有

6. 研究組織

(1) 研究代表者

石橋 朝紀子 (ISHIBASHI, Akiko)
日本赤十字九州国際看護大学・看護学部・教授
研究者番号：80305838

(2)研究分担者

(3)連携研究者

岡村 純 (OKAMURA, Jun)
日本赤十字九州国際看護大学・看護学
部・教授
研究者番号：60316213

上田 礼子 (UEDA, Reiko)
沖縄県立看護大学・看護学部・名誉教授
研究者番号：80010015